

……この子は私と同じだ。

ひと目見たときから、どこかそんな気がしていた。

「すごいよ!! ほむらちゃん!!」

「……!!」

鹿目さんに抱きつかれた暁美さんが目を白黒させる。無邪気にじゃれ合う彼女たちに、私は知らず知らずのうちに口元をゆるめた。

魔法結界の不自然な青空がにじみ、私たちの周りをくすんだ工場地帯の風景が表れる。

コトリと音を立て、私たちから少し離れた路上にグリーンシードが落ちてくると、なおも抱き合ったままの鹿目さんたちを横目に私は路上からそれを拾い上げた。

「暁美さん、初めての魔法退治おめでとう。これであなたも、一人前の魔法少女よ」

「そんな……!! 巴さんや、鹿目さんが手伝ってくれたからですよ」

私の祝福の言葉に、暁美さんはうつむいて首を振った。

「ほむらちゃん、もっと自信持ちなよ!! マミさんも見てましたよね? ほむらちゃんの爆弾、ばーん!! つて!! あの魔法を、たつた一発で!!」

興奮した鹿目さんが身振りで爆発を表現する。

「落ち着いて、鹿目さん。……ほら、あなたただけまだ魔法少女の衣装のままよ」

肩をおさえて優しく告げると、鹿目さんの視線が下に落ちる。自分の格好によくやく気づいた彼女は急にあわて出す。

「みんなには内緒なんでしょう?」

鹿目さんが無言でうなずくと同時に、魔法少女の衣装が光の粒子になって消える。まばたきするまもなく、彼女は見なれた見滝原中学の制服姿に戻っていた。

「巴さん、鹿目さん、ありがとうございます」

「もう、ほむらちゃん。「まどか」でいいって言ってるじゃない」「あなたたちが守ってくれたから、私の爆弾もちゃんと当てられたんです。私ひとりだけじゃ、とても……」

控えめにつぶやく暁美さんを思わず私は抱きしめてしまう。「え、えつと…… 巴さん?」

「そんなことないわ。あなたは本当によくやったわよ。爆弾の作り方なんて、どこで習ったの? もしかして、あれがあなたの新しい魔法かしら?」

「あ、あれは…… ネットでいろいろ調べてたら、作り方を解説しているページがあって、それで……」

抱きしめた暁美さんの身体を離すと、私は彼女の頭をなでた。

「ふ、ふえつ……」

時間を止められる魔法と言われても、止まっている間に活動

できるのは本人だけで、端から見ているだけの私たちには効果がよくわからない。見るからにおっとりした彼女は、しばらくの間は私と鹿目さんのサポート役くらいにしかならないと思っていた。

「魔法の力だけに頼らない戦い方を編み出すなんて、あなたはすごいわ」

私や鹿目さんは魔法で銃や弓を出せる。なまじつかそれらうまく扱えるものだから、現実の武器で戦うという発想そのものがなかった。そもそも魔女にそういつた武器が通用するなど、考えたことすらなかった。

「わたしも弓しか使えないなあ…… マミさんみたいに、武器の形を変えたりとか出来ないし……」

「鹿目さんも、もつと経験を積みめばすぐに出来るようになるわよ。私だって、ただ銃を出す以外のことが出来るようになるまで一年くらいかかったんだから」

あの頃は本当につらかった。うまく魔法を使えないのはもちろんのことだけど、何よりも、いつもひとり——

「マミさんでもそんなに良かったんですか。それならわたしもほむらちゃんみたいに別の武器を作った方がいいのかなあ」

のんきな鹿目さんの声が私を現実に戻す。そうだ。今の私には、この子たちがいる。

周りを見渡せば、工場の設備のすき間からのぞく空はだいぶ赤く染まっていた。差し込む夕日が私たちの影を長く伸ばす。

「こんなところに長居をしてもしょうがないわ。さあ、帰りましょう」

「はい!!」

元氣よく返事した鹿目さんが私の先に立って駆け出す。それを追いかけてよとしてけつまずき、立ち止まった晁美さんが私の隣に並ぶ。

「マミさん、ほむらちゃん、早く早くー!!」

「ま、待ってください……」

私の傍らで晁美さんが息を切らせている。それに気づいて、私は気づかれないように少しだけ歩調をゆるめた。

「晁美さん、大丈夫？ 無理しなくていいのよ」

「は、はい……」

「鹿目さんもあんなにはしゃいじゃって。よつぽど晁美さんが活躍できたのがうれしかったのね」

先に立って歩いている鹿目さんの方を見ながら私が耳元でささやくと、晁美さんは顔を赤くした。

街の郊外を通る高速道路の上に架かる高架橋を渡る。ここを渡りきれば、ある程度は人通りもある市街地だ。

私は二人に気づかれないように肩の力を抜いた。

「それでね、こんどさやかちゃんと仁美ちゃんといっしょに、——に行こうと思って。ほむらちゃんも一緒においでよ!!」

「わ、わたしも、混ぜていいの……?」

「大歓迎だよ!! ほむらちゃん、私たちと一緒に出かけたこと

あんまりなかったよね？ さやかちゃんも仁美ちゃんも、ほむらちゃんのこともと知りたいうって」

魔法が出てくる時間に特に制限はない——キユウベえの言うところでは——けれど、昼間は私たちも学校がある。夕方から探索を始めると、魔法を見つけ、倒して結界から出てきた頃にはすっかり夜になっているのもざらだった。

魔法が居るのはどちらかと言えば人気の少ない、雰囲気悪い地域が多い。最近では郊外の工場地帯や廃墟になることが多いが、私は魔法探索からの行き帰りにはいつも気を張っていた。

「マミさん、わたしここからバスで帰りますね」

市街地に入って少し歩くと、ガラス張りの市内循環バスのバス停を見つけた鹿目さんが振り返って私に告げる。彼女の家は市街地の中心部を挟んで反対側でだいぶ遠い。いまならバスで帰るのが安全だろう。

「今日はお疲れ様。明日、また学校でね」

バス停に駆け込んだ鹿目さんが中から手を振っているのがガラス越しに見える。ここなら人通りも多いし、彼女をひとり置いていっても大丈夫だろう。

きびすを返すと、私はかたわらに居るもうひとりの後輩に笑いかける。

「それじゃ、晁美さん。私たちも帰りましょっか」

鹿目さんやその友人たちの家は街の西側の高級住宅街にある。見滝原中学の生徒のほとんどは、あのあたりの住人だ。

対して私のマンションはターミナル駅から一駅離れた再開発地区で、見た目こそきれいにまとめられてはいるけれど、グレードとしては一步下がる。

晁美さんも魔法少女だと言うことを知らされ、彼女が私たちの仲間に入ってきたあの日。だから私は、晁美さんの家を聞いたときには驚いた。

「晁美さん、ひとり暮らしにはもう慣れたかしら？ 困ったことがあったら、何でも頼ってくれていいのよ」

「は、はい、なんとか…… あ、このまえの料理の本、ありがとうございました」

晁美さんの家は私の家から歩いて数分の、再開発のまだ済んでいない地域の古びたアパートだ。

あのアパートに中学生の女の子がひとりで住んでいるなど、にわかには想像できない。いったいどんな事情があるのか本当に不思議だった。

「それじゃあ、またね」

少しだけ寄り道をして晁美さんの家まで送り届ける。すっかり暗くなった道ばたに立つ電柱から下がる街頭に、秋の虫が群れ飛んでいる。

晁美さんは私の言葉になにも応えず、うつむいたままだ。

「晁美さん……？」

おすおすと伸ばされた晁美さんの手が、私の制服の上着の裾をつかむ。ほんの少し、指先で軽くつかんでいるだけだけど、

だからこそ振り払って離れてしまうのは気が引けた。

「……わたし、怖いんです」

「え……？ どうしたのよ」

「わたしが作った爆弾で、あんな風に…… あれは悪い魔女だった、やつつけなければいけない敵だった、つて思っても、なんだか怖いんです」

顔を上げた晧美さんの瞳にたまった涙がこぼれ落ちる。胸元に鞆を抱きかかえ、押し殺した声で晧美さんは告げる。

「わたし、こんなに危ないものを扱ってるんだって。巴さんも鹿目さんも知らなかったと思いますけど、わたしのこの鞆の中、予備の爆弾がまだ一つ入ってるんですよ……」

その言葉を聞いて、腰が引けそうにならなかったと言えは嘘になる。だけど私は、そうした瞬間にこの子とは永遠に信頼関係を結ばなくなるとも思った。

「ふえっ……!!」

鞆ごと彼女の身体を抱きしめてやると、晧美さんは一瞬身体を硬くする。そのまま抱きしめ続けると、力を抜いた彼女の身体が柔らかくなる。

私や鹿目さんの武器は形こそ弓矢や銃と言った現実での武器と同じだけれど、あくまでも魔法の力で生み出されたものだ。現実の人間相手に効果があるかはわからないし、そんなこと試そうとも思わない。

だけど、晧美さんの爆弾は、彼女の魔法によって生み出され

たものではない。れっきとした現実世界での武器、人を殺す力を持ったものだ。

そんなものを製造し、持ち歩いて、普通の神経でいられると思う方がどうかしている。魔女を倒してからずっと口数が少なかったのは単に疲れているだけではなく、自分の作った爆弾の威力を目の当たりにしてしまったからでもあるのだろう。

「大丈夫。大丈夫よ…… なんだって、晧美さんが作ったんだもの。安全に決まってるじゃない」

耳元でさきやくと晧美さんが身じるぎする。

「もっと自分に自信を持つていいのよ。あなたは、これと決めたら絶対にやり遂げられる子なんだから」

どんな経緯で、どんな願いを込めて彼女が魔法少女になったかは知らない。でも、願いなんてなんだっていい。

私の目の届く範囲にいる魔法少女は、全員私が最後まで面倒を見てあげる。それが、先輩としてのつとめなのだから。

「お、お邪魔します……」

「もう何回も来てるじゃない。そんなにかしこまらなくてもいいのよ」

晧美さんをひとりで放っておくことが出来ず、私は彼女を自分の家に連れてきていた。これも気ままなひとり暮らしだから出来ることだ。